まえがき

ここでは日本三大随筆と言われている3つの作品のなかから、皆さんに読んでもらいたいと思うものを取り上げています。随筆はエッセイとも言われます。随筆という言葉を耳にしたことがなくても、エッセイなら聞いたことがありませんか。現代ならインターネットで色々な人が書いている「ブログ」と言い換えることができるかもしれません。

日本三大随筆とは、枕草子、方丈記、徒然草です。

枕草子は平安時代、方丈記と徒然草はそれぞれ鎌倉時代の初期と末期に書かれた古典文学です。いずれも800年から1000年も前の人が書いた文章です。そんな古い時代の文章を読むことに意味があるのかと思う人もいるかもしれません。逆に、昔の人が何を考えていたのを知ることは、時間を旅する探検のように感じられるかもしれません。

随筆は、筆者の体験や、実際に体験していなくても見たり聞いたりした話などから、筆者が感じたことを、文章にまとめたものです。

文章の長さはそれぞれで、とても短いものから、複数の体験が描かれる長いものもあります。あらかじめ題材を決めて、自分の好みや感じたことを書いたり、噂話に興味を持ったり、書き方もかなり自由です。書きはじめの文章はありますが、物語のように一貫した筋はありません。日記のように毎日欠かさず記録するものでもないため、随筆はとらえどころがないと感じる人もいるようです。

筆者の体験と感じたこと。これが随筆の主題ですから、筆者の個性や性格が文章にあらわれます。随筆には、様々な人物が描かれますが、主人公は筆者です。筆者の見て聞いて感じたことを通して、自分とは違う物の考え方や見方を理解する。それが随筆を楽しむコツの1つかもしれません。

もくじ

枕草子　春は、あけぼの　6
枕草子　生い先なく　10
枕草子　雪のいと高う降りたるを　14
枕草子　三条の宮におはしますころ　18
枕草子　野分のまたの日こそ　ほか　22
枕草子　賀茂へまいる道に　26
枕草子　跋文この草子　30
枕草子　上にさぶらふ御猫は　34
枕草子　中納言まいりて　38
コラム　もの尽くしの段と「をかし」の意味について　42

徒然草　序段　つれづれなるままに　44
徒然草　五十段　応長の比、伊勢の国より　48
徒然草　二五段　飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世　52
徒然草　三五段　手のわろき人の　56
徒然草　五十二段　仁和寺にある法師　60
徒然草　六八段　筑紫になにがしの押領使　64
徒然草　八五段　人の心すなほならねば　68
徒然草　百九段　高名の木登り　72
徒然草　百三十七段　花はさかりに　76
徒然草　百五十段　能をつかんとする人　80

もくじ

徒然草　百五七段　筆執れば物書かれ　84
徒然草　百八八段　或者、子を法師になして　88
徒然草　二百三十一段　園の別当入道は　92
コラム　仁和寺のお坊さん　96
方丈記　ゆく河の流れは　98
方丈記　さまざまな災害に遭う　102
方丈記　ありにくき世　この世に生きる悩み　106
方丈記　山のくらししばしの間　安らぎを得る　110
方丈記　我が身を振り返って考える　114
参考文献　119

枕草子　春は、あけぼの

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく。山ぎはすこし明りて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また。ただ一つ二つなど、ほのかに光りて、行くも、をかし。雨など降るも、をかし。

秋は夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持てわたるもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるび持ていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。

春はあけぼの。だんだんあたりが白んでくる。山の端がほんのり明るくなった空に、紫がかった雲が細くたなびいている様子。

夏は夜。月のある夜は言うまでもないが、月のない闇夜でも、蛍がたくさん飛び交っている様子。蛍は、また、一つ二つなどが、かすかに光って飛んでいるのも、風情がある。

雨が降っていても、趣がある。

秋は夕暮れ。夕日がさして、山の端に沈もうとしているとき、カラスがねぐらに帰ろうとして、三羽四羽、二羽三羽と連れだち、帰りを急ぐ姿さえあわれを感じる。まして、雁などが列をつくり、高い空に小さく見えるのは、とても趣が深い。日が暮れてからの、風の音、虫の声などは、言うまでもない。

冬は早朝。雪の降った朝は言うまでもない。霜が真っ白に降りているのも、またそうでなくても、とても寒い朝。火を大急ぎでおこして、真っ赤になった炭を御殿へと運ぶ姿は（冬の朝に）とてもふさわしいものである。昼になって、寒さがゆるんでくると、火桶の火も白い灰だらけになるのでみっともない。